

広域スペクトラム抗菌薬の適正使用実績

1. 臨床的意義（なぜこの指標を管理するのか）

意義：患者の予後を改善するためには、感染症の診断を的確に行い、最も効果的な抗菌薬を投与することが重要である。特に広域スペクトラム抗菌薬を適正使用することで薬剤耐性菌の発生や抗菌薬関連有害事象の低減が期待される。

2. 指標の定義とベンチマーク

定義：広域スペクトラム抗菌薬（カルバペネム・ニューキノロン・抗 MRSA 薬等）が使用された症例のうち、ガイドラインに準じて適正に使用された症例の割合（および件数）

ベンチマーク：全国的な標準値が確立されていないため、自施設の経年推移をベンチマークとして継続的に評価する

3. PDCA サイクルに基づく分析と評価

【Plan（計画）】

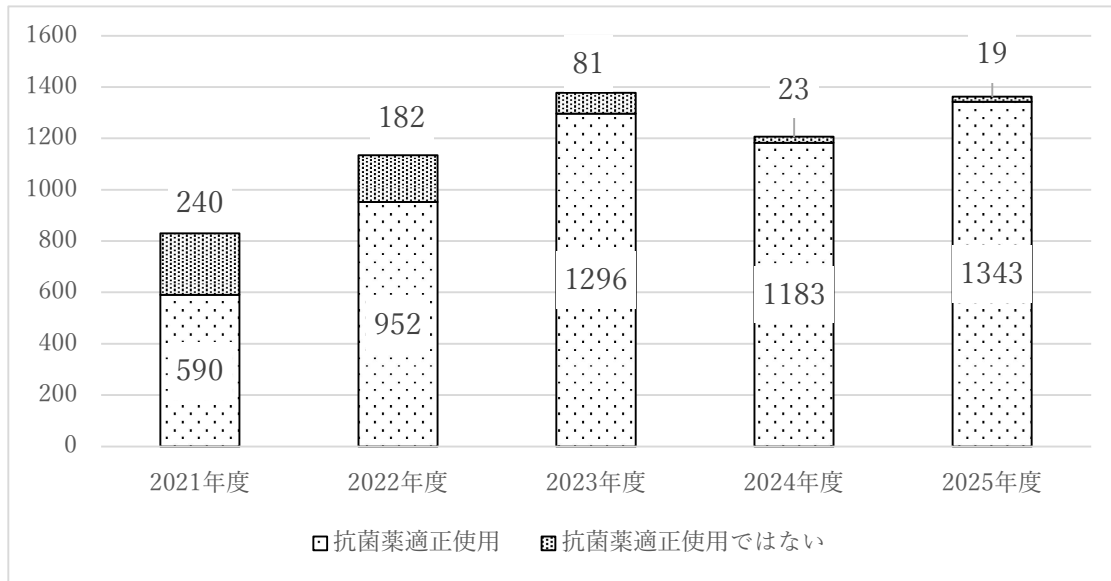
広域スペクトラム抗菌薬を適正に使用することで、患者の予後を改善することと、薬剤耐性菌の発生を抑制すること。

【Do（実行）】

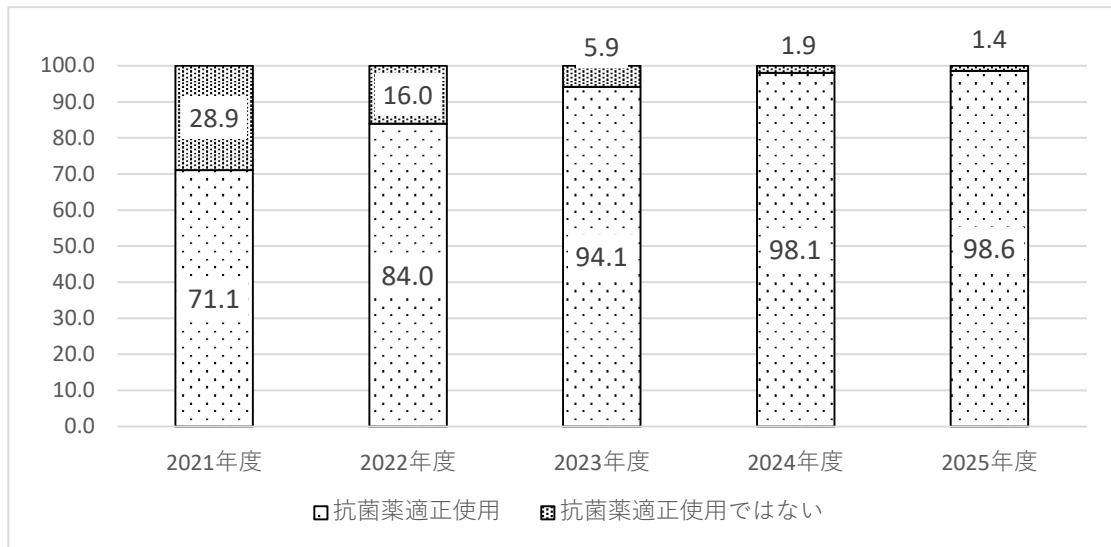
- 環境整備（ハード面）： 特になし。
- 教育・啓発（ソフト面）： 広域スペクトラム抗菌薬使用例については、薬剤部より抗菌薬適正使用支援チームへ情報提供され、不適切使用例については、主治医に対して、適切な治療方針を電子カルテへの記載、または、直接介入により提案している。また、若手医師や研修医に対して、広域スペクトラム抗菌薬の適正使用について、講義を通して教育を行い、医療安全（事故防止・病院感染防止）職員全体研修会で全職員に対して、講習を行っている。
- 組織的支援（ガバナンス）： 感染制御部を通して、部内で情報共有、医長会を通して、全医師と共有している。

【Check（評価）：当院の実績と経年変化】

(n)



(%)



■ 実績に関する分析・解説

- **経年的な質の向上：** 広域スペクトラム抗菌薬の適正使用率は2021年度71.1%から2025年度98.6%まで改善した。一方、不適正使用率は28.9%から1.4%まで減少しており、ASTによる継続的な介入および教育活動の効果が示唆された。
- **全国ベンチマークとのギャップ：** 現時点では全国的なベンチマークが確立されていないため、当院では経年的推移を継続的に評価している。

【Act（改善）：今後の取り組み・予定】

今後も広域スペクトラム抗菌薬使用症例に対するASTの継続的な介入を実施するとともに、全医師を対象とした教育活動を継続し、さらなる適正使用の推進を図る。